

実践発表1 英語でつなぐ小中一貫教育  
～「いつか使える英語」から「今使える英語」を目指して～

発表者 奈良市立富雄第三小中学校

平谷 百合子先生

大田 清美先生

友田 由妃先生

3年前から施設一体型小中一貫教育校として歩いてこられた奈良市立富雄第三小中学校の友田由妃先生、大田清美先生、平谷百合子先生より『英語でつなぐ小中一貫教育～「いつか使える英語」から「今使える英語」を目指して～』というテーマで実践報告をしていただきました。

まず最初に小学部の低学年では英語での簡単なことばや表現に慣れ親しむことを目標とし、読み聞かせ・ゲーム・歌や英会話体操などを取り入れて楽しいインプットにより英語表現に触れ、それらを繰り返すことによりその定着を図っている。中高学年では、Hi, Friends! のトピックスや使用語彙を基本に、友達やALTとのコミュニケーション活動を中心に言い、互いに学び合い、助け合いながら学習に取り組めるようにペアワークやグループワークも多く取り入れている。各学年で英語の絵本を作ったり、英語劇を作成して発表したりしている。また、5,6年生から始まる外国語科や中学部での英会話科とのスムーズな接続を図るために、それぞれの指導者が指導内容を共有するために小中合同で研修を行っている。また、中学部では学んだ英語をできるだけ使うことを目標にALTと共にペアワーク・スピーチ・ゲームなど様々な活動を取り入れながら進めているとの報告がありました。

小学部高学年の外国語科ではそれまでの英会話科の「話す」「聞く」中心の内容に加え、中学部の外国語科へのスムーズな移行を目的として、文字に慣れ親しむ活動を取り入れ、ローマ字やフォニックス、基礎的な英単語や簡単な英文を読んだり書いたりすることにも重点を置いている。また、中学部の外国語科では「聞く・話す・読む・書く」の言葉の4技能をバランスよく高めるよう、それぞれの技能を単独ではなく、「聞いて書く」「書いて話す」「聞いて読む」「聞いて話す」など様々な技能を関連させた活動を積極的に取り入れていることが説明されました。

また、奈良市立一条高校外国語科の生徒による出前授業やオーストラリアの小中一貫教育校であるハリソンスクールとの交流の様子や、休み時間に子供たちを集め担当教員とALTで英語に慣れ親しむ「Fun English Time」のお話がありました。

最後に成果として ①コミュニケーションを図ろうとする意欲の向上 ②「英語を聞

きとる」力の向上 ③「英語で書くこと」への意欲と力の向上 を挙げられていました。自己紹介や日常生活にかかわる会話、賛否分かれる問題に対して、自分の立場を決めて自分なりの主張ができる生徒を育てること、児童生徒が英語を使って積極的に人と会話していく姿勢を養うことが、9年間通して目指している努力目標であると説明されました。

これから全学年を通しての目標をより明確化し、「9年間を通して生徒にどのような英語の力をつけていくのか」「その目標達成に向け、どのようなカリキュラムを立てていくのか」の2点を研究課題として、自分の考えや思いを簡単な英語で伝えることができる児童生徒を小中協働して育てていきたいとの報告がありました。

質疑応答では「どのようにして単語を覚えさせるのか」に対して、「小学部ではとにかく見て聞いて話しての繰り返しです。中学部では会話の中に取り入れることで定着を図ります。」

「小学部の教員の英語力はどのようにしているのか」に対して「教師間でも意識して英語を使うように努力をしています。また小中合同での研修も行っています。」

全般を通して小中一貫教育校ならではの英語教育の様子を映像をまじえてわかりやすく話して頂き、外国語教育におけるインプットの大切さや4技能を関連させた活動の必要性を再認識することができました。とても有意義な時間を持つことができたと思いました。



## 実践発表2 小中一貫の英語教育の在り方を模索して

### ～2小1中施設分離型の小中一貫教育の取組～

発表者 奈良市平城西中学校

高崎 恵美先生

平成27年度から奈良市では小中一貫教育の全市展開が行われることとなっており、平成17年度より平城西中学校区は2小学校1中学校施設分離型の小中一貫教育推進パイロット校となっています。

今回は「小中一貫の英語教育の在り方を模索して」、と題して大きく2つのテーマでお話があり、1つは校区での小中一貫教育の流れの説明、もう1つは英会話の授業を軸に小学校英語の取組についての発表でした。

平城西中学校の小中一貫教育でめざす子ども像は、「確かなつながりの中で、自ら学び続ける心豊かな子」であり、その実現のために①確かな学力、②豊かな心、③健やかな体、を3本の柱と定め小中協働の取組を進めている。特に、確かな学力をつけさせるための取組として、新しく設定した3教科、郷土奈良科（小学校5年から）、英会話科（小学校1年から）、情報科（小学校3年生から）の学習に研究開発を行っている。

（新設3教科は、総合的な学習の時間、外国語活動等の時間を充てることで実施。それ以外は新学習指導要領の標準時間で行う）。新設3教科を中心に小中協働して学びを創り、つなぎ、「国際文化観光都市・奈良の将来をたくましく切り拓く子どもの育成」・「伝統と文化を受け継ぎ郷土愛を育て、世界に発信する子どもの育成」を目指している、と説明がありました。

#### ●具体的な取組

○子ども達が交流し、主体的に学ぶ機会をもつ。（児童会・生徒会活動、部活動、運動会で）

○小学校教員による中学校新一年生の授業参観。

○小学校から中学校へのスムーズな連携のために、「学びのてびき」を作成し、中学校での生活や学習での様々な注意事項を丁寧に説明する。6年生にむけて11月に配布、3回に分けて内容を説明する機会を作る。「家庭学習のてびき」も配布。

○地域にも一貫教育を理解してもらうため、中学校区小中一貫教育だよりを配布。

・英語教育に関しては、

○生徒たちに力試しとして、中学校で年3回英検を受検する機会を作っている。（小学生も挑戦している。）

○小中実務者会を月に1回開催。それとは別に、英語担当者部会も開催している。

学校全体でも学校内での研修を充実させることを行っている。研修方法は教師がお互いの授業を見合い、授業研究をする。今年は夏期休業中に他教科担当も含め小中の全教師合同で英語教育合同研修会を実施した。他教科との合科授業の取組として、家庭科と英語科の教員が共同して「英語でクッキング」の授業をつくり、オールイングリッシュで調理実習にチャレンジさせている。

#### ●研究の成果

- 新設3教科は特に小中協働するいい機会となった。小中での情報の共有は大切に、目指す子ども像の共通認識を持てたことは大きい。
- 問題行動等の減少など落ち着いた教育環境が整った。
- 英会話科や、情報科の学習の積み重ねによる成果が見られた。
- 小中教科部会等の計画的な実施により、小中連携の取組を積極的に行えた。
- 小中お互いの良さを学びあうことにより、授業力を向上させる気運が高まり、確かな学力の育成が実感できた。
- 保護者および学校園支援ボランティアとの連携体制が整ってきた。小中協働の取組が着実な学力向上につながった。

#### ●今後の課題

- 英会話科および情報科などへの人的支援。
- 会議や連絡会が多くなることによる子どもと向き合う時間の減少。(校務用パソコンの活用による情報共有)

小中一貫の取組で大事なものは、何か問題、課題が見つかったときに、小中で協力して取り組んでいくことで、困ったときには人に頼ってよく、人と人のつながりが大事だということを皆が認識して取り組んでいる、という言葉が印象的でした。

#### ●英語（小学校英会話）の取組について

- 小中英語担当者が集まって会議をしている。授業案作成に関しては、小中の教師が集まる機会も限られているので、時間を有効に活用するための工夫として、翌月の指導案は、奈良市のフォルダーに入れ、だれでもいつでも見られるようにしている。
- 指導計画の検討、Can-Doリストの作成を行っている。
- ALT、中学校英語担当、小学校担任、小学校英語担当（英語専科）、の4人できめ細かな指導をしている。つまずきの早期発見に役立っている。(今まではALTは中学校をベースに動いていたが、今後は専科の先生のいる右京小学校をベースにする。中学校から小学校への英語の授業入り込みも来年度からはなくなり、小学校の担任を中心とした英語の授業へ切り替えていく。)

- 小学校1年生から音声のインプットを進め、聞く、話すという言語活動を重視している。小学校での積み重ねにより、中学校では話す聞く活動がとてもやりやすくなっている。小学校での豊かな音声インプットを中学校でどのように生かしていくのかは今後とも研究課題である。中学校での授業の内容も講義中心のものから、グループワークや発表を取り入れた活動に変えようとしている。文字の指導については、小学校で何をどのような段階で導入するのも検討課題である。
- 質疑応答では「英語の嫌いな生徒はいるのか」という問いに対して、85%以上の児童生徒が「好き」または「英語学習は大切」と肯定的にとらえていると回答。「小学校での先取りの支障はあるか」ということについては、小中で同じような活動を取り入れる場合であっても、難易度や完成度を変えることによってマンネリ化せずスパイラル学習ができています。同じフレーズを使うときでも小学校では日本語を交えて言っても良いとし、中学校では英語のみにするなど、対応している。小学校は年間35時間しか英語の時間がないので、たとえ同じような内容を繰り返すことになっても飽きずに、むしろよい復習になっていると言える。
- 「英語のパスポート」を授業に持参し、活動ができればシールやスタンプをもらえるなど、授業への積極的な参加を促している。毎回授業の最後に振り返りシートを記入させている。

研究発表、質疑応答とも時間いっぱいまで行われ、非常に活発な交流となりました。2小学校1中学校が連携して、多忙の中にも小中教師間の連絡を効率よく充分に取り、授業研究から日々の連携授業へと充実した取組が進められるなどの創意工夫が見られました。来年度からの奈良市小中一貫の全市展開がとても楽しみです。小学校における英語活動推進の動きにあわせて、今後ますます小中学校の連携が大切となり、より長いスパンでの取組を見据えた中学校英語授業の在り方を考えていかなければなりません。これからの英語授業改革に学ぶべきことが多い研究発表となりました。



## 記念講演 小中連携と英語授業改革

スムーズな小中接続のために

やめるべき「問題のある指導」と行うべき「あまり行われていない指導」

京都外国語大学

教授 鈴木寿一

### ●小中連携の実態について

2011年度時点での調査（文部科学省）では調査対象（9,930校中）の47%の小学校が何らかの形で「小中連携を実施している」と答えている。また、連携実施小学校（4,696校中）の29%の小学校が「研究授業の参観と協議（年2、3回）を実施している」と答えている。

### ●小中連携の限界—中学一年生の戸惑い調査より

2012年5月上旬に大阪府内の中学校4校の一年生（有効回答者数469名）に以下の質問①～③をしたところ、次のような結果が出ている。

質問①「中学校の英語授業についてどう感じますか」

「小学校の授業とはとても違う」 377名（80.3%）

「違う」 72名（15.4%） 合計449名（95.7%）

質問②「小学校の授業と違うことで戸惑いを感じますか」

「戸惑う」 395名（84.2%）

質問③「どんなことに戸惑いを感じますか」

「文法が難しい」・「聴いたり話したりする時間が少ない」・「ずっと座ったままで退屈」・「単語や文を口に出す回数が少ない」・「単語を書くことができない」・「説明：よくわからない・長い」・「プリントやワークブック：難しい・おもしろくない」

### ●小中連携の必要性

小中接続の主役は中学校であるとのことでした。理由としては、小学校の指導法改善には限界があるからだそうです。具体的なものとして、授業時間数が少ないことと教員に関わる問題（英語力や英語指導力）が挙げられていました。対処法としては、中学校での指導を工夫して、「外国語活動」を経験した生徒が、入学後に戸惑いを感じないで学習できるようにする必要があるとのことでした。

### ●スムーズな小中接続を目指すための授業のあり方

①音声重視

②意味と音声を結びつける指導（TPRの活用）

- ③意味理解後に多様で大量の音読指導
- ④音読できるようになってから書かせる。
- ⑤文の一部を変えて、自分の言いたい（書きたい）ことを言わせる（書かせる）。

●「やめるべき指導」から「行うべき指導」へ

やめるべき指導の例と行うべき指導の例を提示しながら、説明していただきました。具体的な指導例としては以下のものがありました。

①教科書本文の書写

予習はさせるべきではない。本文書写は復習や宿題として課す。単に書き写すより、Read and look up→Say→Write→Check→Correctの方法で書き写す。

②単語の意味調べ

予習はさせるべきではない。授業でフラッシュカード、語彙リスト、絵や写真、実物、TPRによる語彙指導が効果的である。

③本文の和訳

これもまた、予習でさせるべきではない。繰り返し本文を聴かせたり読ませたりして、内容を理解させることが大切であり、それにあたっては、文構造を説明しながら練習させ、文構造の理解後、必要なら和訳させるのが効果的である。

④文法指導

具体から抽象へ（TPRによる指導）

生徒とインタラクションしながらのtalkによる文法指導→状況を設定した短い英文による文法指導→語形変化を伴う語句整序問題による指導という順序での指導が効果的である。

⑤板書事項のノートへの書写

時間の無駄である。なぜなら板書事項を書き写したノートは、定期考査終了後は活用されないからである。板書は英語を引き出すために行うべきであり、重要事項はプリントして配布するのがよい。そして、浮いた時間を、四技能の練習やコミュニケーション活動に充てる。

⑥説明と和訳

説明と和訳に頼った、インプットやインテイクのための活動が少ない授業はやめ、簡潔な説明をすべきである。少し説明しては練習させる。文構造の説明はプリントにして配布するのがよい。そして、インプットやインテイクのための活動が多い授業（ラウンド制指導法）をすべきである。

⑦教科書本文

教科書本文を大切にしたい授業が大切である。事実発問・推論発問・評価発問を与

えて、本文を繰り返し聴かせたり、読ませたり、音読させたりする。(ラウンド制指導法)

#### ⑧アウトプット

十分にインプットとインテイクの活動を行っていることを前提とし、必ずアウトプット授業を行う。アウトプット活動は、再生から産出へ。(ラウンド制指導法)

※ここに出てきたラウンド制指導法とは、次の(1)～(3)を目指す指導法である。

- (1) 多様な方法を用いて、いろいろな角度からひとつの教材を学習させ、言語コミュニケーションの基礎となる言語処理能力を向上させる。
- (2) 四技能をバランスよく伸ばさせる。
- (3) 英語によるコミュニケーション力と入試に対応できる英語力の育成。

#### ○TPRによる指導手順

行うべき指導について TPR による指導を提示していただきました。手順としては、

- ①前時の復習…前回到学習した英文を教師が提示して、生徒に動作させる。生徒ができない時は、教師がモデルを示す。
- ②学習する英文の提示…本時のポイントと新語を含んだ文を口頭で提示し、何%ぐらい理解できたか尋ね、その理解度を記録させる。「授業の終わりには、今提示した文が全部理解できるようになる。」と予言する。
- ③練習…教師が命令文を言い、教師が動作をして、その動作のみ生徒に真似をさせる。→教師が命令文を言ってすぐに動作に移らず、自分の動作を意図的に少し遅らせて、生徒たちが教師よりも早く動作を始めることができるかを確認する。→教師は動作をしないで命令文を言い、生徒だけで反応させる。確実に反応できるようになったら、別の生徒を指名して練習を続ける。
- ④まとめ…最初に学習した英文を再度、口頭で提示し、どのくらい理解できるかを記録させ、最初の記録と比べさせる。→新出英文を印刷したプリントを配布し、音読練習を行う。→(学習が進んだ段階、または生徒から希望があれば)生徒に発話させ(英文を音読させ)、その内容を教師または他の生徒が演じる。(この活動は、次の時間に復習として行ってもよい。)

で、上記の順に指導すると生徒の英語力を伸ばす大きな材料になるとお話されました。

#### ●日本人学習者に対する TPR の効果

TPR の指導の効果として、大きな生徒の変容として以下のものがあげられる。

- ①英語嫌いの生徒の減少や、英語が苦手な生徒の英語学習に対する姿勢の改善
- ②TPR による指導を中学一年生時の一年間受けた生徒は、二年生で文法訳読・機械的口頭練習中心の指導を一年間受けても、TPR の指導を一年時の一学期間しか受けなかった生徒に比べて、四技能で優れている傾向がある。
- ③小中接続に TPR のほうが従来の指導法より有効

英語（外国語）活動が週 2 回行われている A 小学校出身者と英語（外国語）活動が週 1 回行われている B 小学校出身者を対象にした効果比較

- ・中学校で、従来の指導法で 1 年間指導された生徒の場合、英語力も英語が好きな生徒の割合も、A 小学校出身者より B 小学校出身者が優れていた。
- ・中学校において T P R で指導法で 1 年間指導された生徒の場合、英語力も英語が好きな生徒の割合も、A 小学校出身者と B 小学校出身者の間には差がなかった。

## ●まとめ

我々教師は、自分の授業を見直さなければならないのではないかと。講演テーマにある「やめるべき問題のある指導」の授業をしていないか「やめるべき問題のある指導」から「行うべき、だがあまり行われていない指導」へと切り替えていくことが、これからの国際社会で生き抜く子どもを育成することにつながるのである。グローバル人材育成のため、英語授業改革は私たち英語教員の使命なのである。

